特集１　「ムジナモ」野生復帰への道のり

ムジナモは、沼や水田などの水面に浮遊する食虫植物で、NHKの連続テレビ小説「らんまん」のモデル、植物学者の牧野富太郎が発見したことでも知られています。

羽生市にある宝蔵寺沼では、羽生市ムジナモ保存会、埼玉大学、羽生市などが連携し、これまで「野生絶滅」の状態であったムジナモの保護増殖に取り組んだ結果、自生・繁殖していることが認められ、令和７年１月、埼玉県レッドリスト植物編で絶滅危惧ⅠＡ類に分類され「野生復帰」を果たしました。

これは国内でも極めてまれなことで、県内では初めての事例です。

本特集では、ムジナモが野生復帰を果たすまでの道のりを紹介します。

ミジンコなどを捕食しているムジナモ（黒い部分がミジンコなど）

野生絶滅

飼育・栽培下のみで存続している種

▶ **野生復帰**

令和７年１月～

絶滅危惧ⅠＡ類

ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

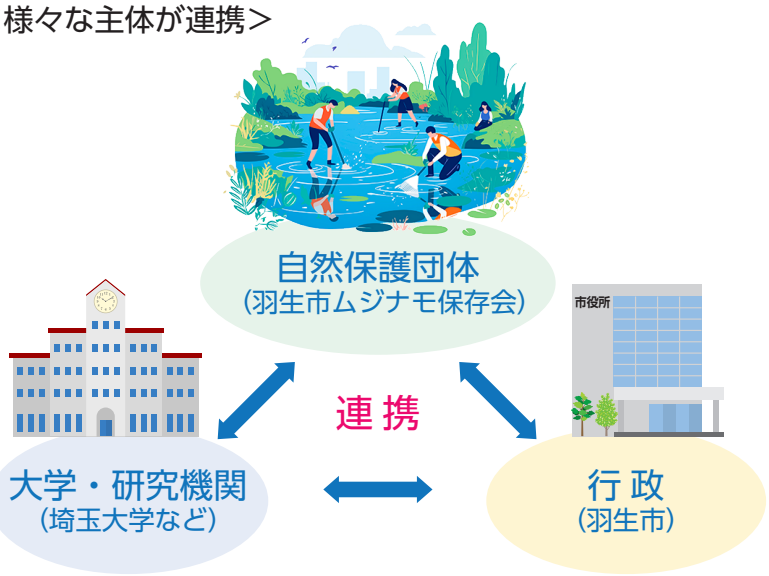
ムジナモ　（モウセンゴケ科ムジナモ属）

根を持たず水面に浮遊し、ミジンコなど水中の小動物を直接捕まえて栄養にする食虫植物。形がアナグマ（ムジナ）など動物の尾に似ていることから、「ムジナモ」と名付けられました。

７～８月になるとごくまれに白い花を咲かせます。

左から 羽生市ムジナモ保存会 野中会長、埼玉大学 金子名誉教授、河田 羽生市長、秋本 羽生市教育長（令和７年１月撮影。役職はいずれも当時）

＜様々な主体が連携＞



羽生市宝蔵寺沼におけるムジナモ野生復帰への道のり

スタート

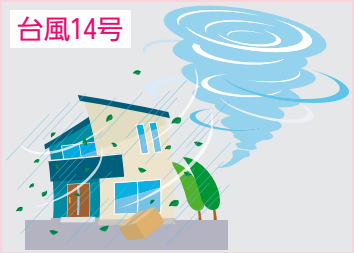
1921年（大正10年）
地元小学校の教員の速水義憲氏が羽生市内で初めてムジナモを発見。

1961年（昭和36年）
羽生市むじなも保存会（現・羽生市ムジナモ保存会の前身）発足。

1961年９月の宝蔵寺沼

1966年（昭和41年）
宝蔵寺沼がムジナモ自生地として国の天然記念物に指定される。

1966年（昭和41年）



大雨による流出
水質汚染など
➡ 昭和42年秋以降にムジナモが消滅

1968年（昭和43年）
羽生市が宝蔵寺沼の自生区域を公有地化。以降管理を継続。

1974年（昭和49年）
埼玉県教育委員会による緊急調査。

1976～1981年（昭和51～56年）
羽生市による第１回緊急調査。埼玉大学などの研究者が生物・水質・地質など各種調査・実験を行い、ムジナモ消滅の原因を解明。

1983年（昭和58年）
羽生市ムジナモ保存会発足。

自宅でムジナモを栽培する保存会の会員

野生復帰を目指す試み。
・調査　・放流実験
・食害生物対策
・水質対策

2009年（平成21年）～
羽生市による第２回緊急調査（埼玉大学に委託）。
・ウシガエル幼生（オタマジャクシ）など食害生物の駆除
・浅瀬の造成（多様な環境の創造）など
⬇
多様な生物がバランスよく生育できる環境の整備

2010年（平成22年）
40数年ぶりに、自然下で越冬し再浮上したムジナモを70株確認。

保存会による食害生物の捕獲（投網・追い込み漁）

2016年（平成28年）15万株突破。

2022年（令和４年）100万株突破。

地元小学生によるムジナモの栽培と放流

ゴール！そして未来へ…

2025年（令和７年）
祝 野生復帰

水面いっぱいに繁茂したムジナモ

これからも多様な生物とムジナモが共存するムジナモ自生地を守り続けていきます！